光の国の者たち

sora tokiyuki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
光の国の者たち

【Ｎコード】
Ｎ３９８０Ｐ

【作者名】
ｓｏｒａ　ｔｏｋｉｙｕｋｉ

【あらすじ】
朝は、リクオが連れてきた。
日常は、ここにある。
今、目の前で戯れるまだ若き魂とともに、愛おしい日々がここにある。。

（前書き）

この小説は、ＷＪ　連載中『ぬらりひょんの孫』（原作：椎橋寛）の二次創作です。
ＢＬ　要素を含みますので、ＢＬ　に詳しくない方は、ご遠慮ください。
過激な描写は全くありません（書けません・・・）なので、年齢制限はありません。

三巻、牛鬼様（↑様付け）視点です。

からりからりと澄んだ音で、意識が戻った。
冷たい手が額に触れる。心地よい温度に惹かれて、ゆっくりと瞼を押し上げる。
「あ、牛鬼様、起こしてしまいましたか」
黒い艶やかな髪が、表情の半分を隠している。言いつけを守り、鍛錬を怠らず、組のためにまっすぐに生きる、その志が満ちる美しい目が、自分を見下ろしていた。
「牛頭か」
「はい」
牛頭丸は、濡れた手ぬぐいを手桶にそっと落とした。からからという音は、手桶の中の氷のようだ。
「どのくらい眠っていた？」
「奴良の若頭が山を下りてから、半日ほどになります」
障子の向こうは、もう夜の帳が降りていた。部屋には小さな火が灯されている。嵐に見舞われた昨夜とは、まったく違う静かな闇が、満ちている。
『次の総会で会いましょう。待っています』
人の姿をしたリクオは、そういって笑った。夜の顔とはまるで違う顔だ。どこからみても人間にしかみえない。親になってやるよといった、総代の血を引きながら、あいつは完璧な人間の姿で私を受け入れた。私をみて笑い、障子の向こう側に消えた。青い空とまばゆい光の中へ、歩き出した。
人に受け入れられず、母を失い、ついに妖怪と成り果てたこの私に、今度は人間が手を伸ばしてくるとは。
これをなんと呼ぶのだろう。
定めか、縁か。
薄暗いはずの部屋なのに、リクオの残像が眩しくて、軽く瞼を閉

じる。
「あいつが、三代目になるのですか」
静かな声だった。再び目を開くと、牛頭丸が相変わらずまっすぐな瞳を自分へと向けていた。
「納得できぬか」
牛頭丸の頬が小さく軋んだようにみえた。
リクオの刃を受けたのならば、痛いほどにわかっているのだろう。でもそれを認めたくない。負けず嫌いの牛頭丸らしい表情だ。
「あなたが認めたならば、オレは従います」
ふっと笑みがもれた。
こんなとき、牛頭丸は自分に似ていると思う。私の血を引いているわけでもないのに、長い年月を共にすると、自然と似てくるのだろうか。納得できなくても、規律に従う。じっと自分の内側で考えて、ときに葛藤し藻掻きながらも、ゆっくりと折り合いを付けていく。
よく似ている。
「そういうところがかわいくないな、おまえは」
「は？　なんですか、それ。リクオにやられて、頭までおかしくなりましたか」
「いや、大切なことを思い出しただけだ」
「よくわかりません」
「独り言だ。気にするな。それより、馬頭はどうした？」
「呼ばない方がいいですよ。台所でなにやらあやしげなものをこしらえていましたから」
「あやしげなもの？」
そのとき、障子が小さく揺れているのに気づいた。風ではない。屋敷の床からなにか振動が伝わってくる。
「・・・きさーまー」
「ああもう、牛鬼様が噂なんかするから」
「ぎゅーきさまー」

馬頭丸の声だ。床の振動は、まぎれもなく馬頭丸から発生している。床が壊れるほどの音をたてて駆けてくる。そのままの勢いで、ばちーんと障子が開いた。
「馬頭！　静かにしろ！　牛鬼様はお体がまだ・・・はうあっ」
「牛鬼様、牛鬼様、ほらほら、これみてください」
入り口を塞ぐようにして座っていた牛頭丸を蹴り倒し、踏みつけて、馬頭丸がやってくる。その手に皿が一枚。その上に黒い鞠のようなものが載っている。枕の横にぺたりと座ると手にした皿をぐいぐいと押しつけてくる。
「これは・・・」
「おにぎりです！」
とは思えない大きさだ。馬頭丸の頭半分ほどはある。しかも真っ黒だ。どうやら海苔がこてこてに貼り付けられているらしい。それはいま、私の胸の上にあった。なにやらすさまじいにおいが鼻腔を直撃する。
「牛鬼様、ボクが作ったんですよー。牛鬼様、怪我しちゃったから、早くよくなるように栄養いっぱいつけてもらいたくて、究極に特製にしました！」
「め～ず～」
押し潰されたような声が、はしゃぐ馬頭丸の向こうから低く響いてきた。
「あれ？　牛頭じゃん。そんなとこでなにやってんの？」
「おまえなあ！」
牛頭丸が馬頭丸の着物の襟首を捕まえて引き寄せ、その両頬を思い切りつねる。
「あがががが。いひゃいいひゃいよ」
「おまえはいくつになったら、ソレが治るんだ！　それでも副若頭か！　もっと自覚をもて！　自覚を！　だから烏天狗に逆さづりにされんだよ」
「牛鬼様の前でいわないでっていったのにぃ」

騒々しい。
そして、それはいつもと変わらぬ日常だった。
昨夜、死を覚悟して挑んだ闘いは、あの嵐に吹き飛ばされてしまった。長い時間をかけて出した答えは、影も形もない。終わらない嵐はない。明けない夜はない。
朝は、リクオが連れてきた。
日常は、ここにある。
今目の前で戯れるまだ若き魂とともに、愛おしい日々がここにある。
「牛頭丸、馬頭丸」
この屋敷で、幾度も幾度も呼んだ名だ。二人が慌てて正座をする。
「申し訳ありません。牛鬼様」
牛頭丸が頭を下げる。馬頭の頭もぐいぐい畳に押しつける。布団から身を起こし、黒い握り飯の載った皿を、そっと二人の前に置いた。
「牛鬼様？」
馬頭丸が、頭につけた骨のかぶり物からそっと伺う。
「馬頭、取り皿と箸を三人分持ってきなさい。みんなで食べよう」
「はい！」
馬頭が走り出していく。
「牛頭、お茶を煎れてくれないか」
「はい、牛鬼様」
牛頭が背を向けて、用意されていたポットから急須に湯を注ぐ。
「牛頭」
「はい」
「私はしかるべき処分を受けるだろう。そのときは、馬頭のことを頼む」
急須を持つ牛頭の手は、ほんの一瞬だけ留まったけれど、静かな声だけが返ってきた。
「お心のままに」

「牛鬼様！　お箸、持ってきましたぁ！」
「じゃあまずは、牛頭から食べなさい」
「えっ！　牛鬼様、もしやオレに毒味しろと？　なにげにひどくないですか、それ」
「毒味ってなんだよ、ひどいのは牛頭だよう～」
「おまえが作ったもんなんか食えるか！　覚えてるぞ。昔々、おまえがまだ米粒みたいにちっちゃい頃、ぼた餅だといつわって、○○の××したもの食わせただろーが！」
「○○ってなんだよ」
「口にもしたくないんだよ！」
騒々しいままに、夜は深くなっていく。
ともに食し、ともに寝る。
これが家族というものだろうか。
奴良組一派となり、父と呼べるに値する者を主と仰ぎ、生きてきた。気づけば、傍らに、自分を目指しまっすぐに生きる者たちがいる。自分だけをみて、焦がれ、追いつこうとする者がいる。
本当の父の記憶はない。母もとうに忘れた。
それでも、これを家族と呼んでもいいだろうか。血の繋がりと同じものが、ここにあると信じてみてもいいだろうか。
日常の中に、新しい夜が、穏やかに降り積もっていく、そんな気がした。

（後書き）

二作目は、原作を読んでいるうちに妄想が止まらなくなった牛鬼様とリクオのエピソードのその後です。ああいうキャラ、好きなんですよね～。袂を分かつとか、仲間なのに闘うとか、そういうシチュに萌えてしまうんです。「牛鬼の愛した奴良」いい！　すごくいい！　胸に響きます。そんな響きを受けて生まれたお話です。なかなか活字力がなくて、拙いお話にしかならんところがくやしいですが・・・。牛鬼様ネタはいくらでも浮かんできそうで、これからもいろいろ書いていくと思います。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3980p/

光の国の者たち

2010年12月11日09時40分発行